

佐賀大生 生ごみ堆肥化

環境教育 実習の一環

学内緑化に活用へ

佐賀大で環境について学ぶ学生約20人が30日、実習の一環で段ボール箱を使った生ごみ堆肥作りを佐賀市の同大本庄キャンパスで始めた。約2か月で出来上がる見通しで、学内の緑化に活用する。

(佐々木浩人)

同大は、昨年度の新入生から教養科目で、環境教育に関する科目を選択できるようにした。今年度から、2年生の約50人が実習に入っている。実習の一つとして取り組む生ごみ堆肥作り



段ボール箱を使った生ごみ堆肥作りを指導する下田代さん(右端)

には、資源環境コースを選
択した8人をはじめ、環境
問題に関心のある学生も参
加した。

30日は、9年前から生ご
み堆肥作りを続けている下
田代満さん(63)(武雄市)
を招いた。下田代さんは、
段ボール箱を二重にして丈
夫にすることや、生ごみを
落ち葉、米ぬかと混ぜる独
自の方法を指導した。こ
の方法は、材料がほぼ無料
で手に入るのが利点とい
う。

学生たちは、持ち寄った
生ごみに米ぬかを混ぜた
後、米ぬかを混ぜた落ち葉
で挟むようにして段ボール
箱に入れた。出来上がりを
比較するために、落ち葉の
代わりに学内で刈られた木
の枝のチップを使うなど計
四つの方法で作る。

今後、学生は交代で1日
1回かき混ぜ、温度や水分
含有量を週1回のペースで
調べる。出来上がった堆肥
は秋以降、学生が大学にふ
さわしい緑化策を考えて、
花などを植える際に使うこ

いう。

農学部生物環境科学科2
年の岡部誠さん(19)は「環
境を学ぶことは卒業研究や
就職にも役立つと思いい履修
した。きちんと取り組んで
いい堆肥を作りたい」と話
していた。

指導する農学部の染谷孝
准教授(58)(土壌微生物学)
は、将来的には堆肥作りの

規模を拡大し、キャンパス
内の落ち葉や学生食堂の生
ごみを使って、ごみの焼却
量削減に結び付けることも
検討している。染谷准教授
は「緻密な作業の積み重ね
で、質の良い堆肥を作る経
験は、環境を学ぶだけでは
なく、社会で通用する人材
の育成にもつながる」と期
待する。